

御殿

平屋の御殿は、厳密には宮殿ですが、大きさと機能においては大きな田舎の別荘とした方が適当です。全部で15の部屋がある御殿には、庭園の池の景色が一番よく見える改まった応接スペースがあり、奥には睡眠、着替え、料理、入浴などの生活に関わる部屋があります。これらは、高級邸宅に典型的な設備です。イヌマキの木で仕上げられた外装と内装の壁面、および、日陰を作りつつ光と風を通すために上方に跳ね上がる「跳ね上げ戸」と呼ばれる蝶番のついた大きな戸、白い漆喰の装飾がほどこされた赤瓦の屋根は、琉球の民家に典型的に見られます。内装の多くの要素、たとえば、畳（イグサを織って作ったマット）、障子（半透明の和紙のスライド式目隠し）、床の間（重要な部屋の壁に沿って設置された装飾的な空間）、そして装飾的な屋台骨が見える構造は日本に由来するものです。

御殿は20世紀初頭に2回増築され、現在は自由な配置の複数の翼が、涼しい板張りの廊下で接続されています。落ち着いた内庭は、光と風をもたらします。識名園の御殿とその他の建物は、チャギとも呼ばれるイヌマキの木で作られています。この丈夫で硬い木は、成長するにつれてねじれていきますが、御殿の軒下の外柱にはそれが自然の状態で使用されており、この特徴がうまく活かされています。この木は、根元の方がより耐水性が高いとされており、地面の基礎石の上に設置する際は、そちらを下にします。沖縄ではイヌマキが不足するようになったため、この木は1992年に御殿が復元されたときに九州から輸入されました。